

論文

王朔の小説とその時代背景

任景波

主旨

中国は長い間、文学創作は「人民に奉仕する」、「人民を教化する」という基本方針に則って展開されてきた。それゆえに、作家は政府の職人と同じく、宣伝され、利用され、「人類精神の技師」とまで称えられた。1978年から進められた「改革開放」政策は社会に多大なインパクトを与え、経済的社会的構造を大いに変えただけでなく、中国人の思想意識の深いところにも変化をもたらし、その結果、新中国の文化理念が挑戦されるようになる。王朔は挑戦者の先頭に立ち、早くも1980年代前半から「告発文学」と一線を画し、経済や社会転換期に当時中国独特の現象や思想をユーモアたっぷりの言語で生々しく表現した。王朔小説は中国の現代文学文壇に非常に重要な地位を占めるが、「市民文学」の先行者と称えられる一方、「痞子文学」、すなわち「ちんぴら文学」だと断定され、社会の既成の枠組みからはずされた人々だけを書いたものと批判されている。本論文は王朔小説の言語的な特徴や思想性を取り上げ、王朔小説の時代背景を分析するものである。

キーワード：王朔 王朔小説 作家 頑主 ちんぴら文学 市民文学 風刺 反語

一、はじめに：

「中国ロックの父」と言われる崔健は1986年に『一無所有』（一物もない）という一曲を借りて当時の中国社会の若者たちが直面していた抑圧に対する反発のエネルギーを一気に噴出させた。一方、王朔は『空中小姐』などの成果を踏まえて1986年から『頑主』シリーズを書き出し、伝統的な中国タテ社会を転覆し、ユーモアたっぷりに市民社会の生き方を描いた。九十年代末期、馮小剛を監督として王朔の代表的小説『頑主』を脚色した映画『甲方乙方』が大成功を収め、馮小剛は中国大陸では時々興行収入一位の座に座る名監督となった。これら大衆文化の先行者たちの共通点は明らかであり、時代の流れにおける真実を謳歌しており、市民社会が形成されるプロセスにおける社会的矛盾を洗練された技法で表現したのである。その上、彼ら三人は北京育ちの人たちで、彼らの出現は経済的な原因によって一時的に低下した北京の文化的影響力を格段に向上させ、中国人の行動パターンまで変えたのである。特に王朔小説にある独特な北京地方の言葉は既に全国的に流行し、標準語になりつつある。

王朔は多作な作家と言える。合わせて200万字前後の小説を書いたほかに、映画やテレビドラマの脚本も数多くあって、それらは手書きの時代においては一種の力仕事であったであろう。1988年に王朔の小説から脚色した映画『輪廻』（『浮出海面』から）、『頑主』（同名小説）、『大喘氣』（『橡皮人』から）、『一半是火焰 一半是海水』（同名小説）が上映され、1988年は映画界に限らず芸能界や文学の世界においてもこの年は「王朔年」と呼ばれたのである。その後、多数の連続テレビドラマも成功を収め、人気を集めて、小説の読者に限らず、全国的に王朔ブームを引き起こしたのであった。

王朔の小説は、崇高な品性と人柄を持つ、一庶民にとって神仙世界に近い「偉大」な英雄を描いたものではない。巧みな手法を用いて官僚の腐敗や偽善、知識階層のシニシズム、社会の矛盾及びそれに基づく市民社会のまったくやむをえない構造を読者に再現している。

王朔小説に対しては、注目され始めた時から対立した賛否両論があった。「市民文学」の先行者と称えられる一方、「痞子文学」、すなわち「ちんぴら文学」だと断定し、社会の既成の枠組みからはずれた人々だけを書いたものと批判されてもいる。王朔小説の成功を理解するには、王朔小説そのものの分析だけでは不十分で、その時代背景の下で考えなければならない。

本論文の目的は、王朔小説における言語的、思想的な特徴及びその時代背景を明らかにする上で、王朔小説及びその主人公たちの行く先を読むことにある。

二、王朔小説の時代背景

1949年に中華人民共和国が成立して以来、長い間小説は文明やあるいは先進的思想を伝達する道具として使用されてきた。現実主義であれ、非現実主義であれ、名義上「政治に奉仕する、人民に奉仕する」というのは文学の基本方針であるが、実際には、「政治に奉仕し、人民を教化する」ことになっていた。文化大革命の期間中において、この方針は極端にまで解釈され、文学は完全に政治紛争の道具と武器になり、作家は有効に組織され、給料が国や政府によって支給され、学校の教師と同じく「人類精神の技師」とまで称えられた。というわけで、一部の戦争や土地改革を反映する題材の作品を除くという前提をしておかなければ、文化大革命が終わるまで、中国文学には長い空白が存在するというのが事実であろう。

新中国が成立して以来、社会を安定させるために、1957年の毛沢東による「百花斉放・百家争鳴」のスローガンに表れているように、誰もが自由な執筆活動や批判活動ができるという、まさに全面的に言論の自由、文化の自由が与えられたかのような時期もあったが、その後まじめに自己主張する作家たちの中には罰を受ける人が多かった。「百花斉放・百家争鳴」方針は知識人を中心に忌憚のない意見を出してもらうことにより、社会の矛盾点を抽出して解決するためであって、自由精神に基づいたものではなかったのであろうし、中国伝統のタテ社会に変化をもたらすこともなかった。特に文化大革命の期間中において、イデオロギー上の効用が過剰に強調されたため、八十年代初めまでの新中国文学は英雄主義的な愛国主義的教育、革命思想の教育に満たされており、中国文学は革命文学の一種になってしまった。今でも一定の地位にある小説としては農民革命の『創業史』、明朝末年の農民大反乱をたたえる『李自成』、共産党中央所在地を国民党の侵攻から守るということを題材とした『保衛延安』などがあるが、これらはいわゆる「革命小説」であって、人間性を描写したものはまったくなかったのである。皮肉にも、これらの小説の主人公はアニメーションのキャラクターのように、同じ身振りをし、同じ言葉を用いる。長編小説『李自成』にある農民リーダーの李自成人物像は、中国共産党の幹部とほぼ同じである。

1976年に「四人組」の失脚によって、政府の政策に従い、文化大革命及びそれ以前のいわゆる「極左政策」の誤りを糾弾し、自分や国家の被害を訴える、いわゆる「告発文学」が盛んになった。「告発文学」は知識青年がこれは革命文学の変身の一に過ぎないというもので、今日になって、記憶に残るものは少ない。当時20歳前後の王朔も「告発文学」の青年作家の一人で、処女作である数千字の短編小説『等待』は一学生が「四人組」の失脚を持ちつつあるという「主旋律」にぴったり一致した政治小説でもあった。七十年代末期と八十年代初期の文壇は、政治小説の天下であった。しかし、当時言論の自由は方向と

して開放されつつあるという段階にあったが、社会的構造に安定が保たれたため、「作家」たちは文化大革命という動乱時期と比べても、本質的な変化が乏しく、ただ国や政府の役人に言われた通り文字を綴ることしかできなかったと言えよう。仮に、王朔が大多数の「作家」と同じくそのような「告発文学」を書き続けていたとしたら、既にいつの間にか忘れられてしまっていたのではなかろうか。

「改革開放」の深化に伴って、中国の社会構造は大きな変化を遂げた。社会全体が痛みを感じるとともに、経済発展が第一という方針の下で、金銭が全てを量る基準になるとさえ見えた。しかし、社会の下層にある者や都市部にある自分の思想を持ち始める若者から反発の声が出る。外国の新思潮が入り込むにつれ、人々が我先に独立、自由かつ表現様式を求めて伝統的なイデオロギーによって支配されてきた表現様式に反逆しようとした。このような文化的革命というべき現象は、中国の歴史上前例がないものである。

「改革開放」初期の外資導入は、主として台湾、香港そして海外に住む華僑や華人の資金や人脈を借りて行われたもので、広東、福建、上海など東南沿海地域を中心に、資金の流入に伴って、中国大陸に新たな文化的な要因を注入した。それゆえ、八十年代前半においては、比較的立ち遅れていた北京に住む人は守旧的で、田舎者とも認識されたこともあった。王朔や崔健など新文化人の努力によって、北京はあるべき地位に復帰することに成功したのである。

三、王朔の小説創作における三つの段階

1978年、1982年そして1984年に発表された三つの短編小説、王朔自身が言うところの「習作」の作品を除くと、王朔の小説創作はおおむね三つの段階に分けることができよう。第一段階は恋愛小説で、第二段階は『頑主』シリーズで、第三段階はリアリズム作品であり、1991年に出版された『我是你爸爸』がその代表作である。『看上去很美』はリアリズム精神に則ってはいるが、言葉遣い、物語の筋の設定、時代背景などすべての面において優秀であり、王朔小説が新たな段階に入ったことを意味するが、それ以後は王朔の新作は乏しく、本論文ではそれを分析の対象としない。青年だった王朔は激しい中国の改革の波に乗り、小説の風格を絶えず発展させ、変化させてきたゆえに、この分類法はいまいきなもので、各段階の代表作を取り上げることができるが、必ずしもはっきりしないところもあり、重なる部分もある。

三・一、『空中小姐』に代表される恋愛小説

恋愛小説は『空中小姐』（1984）を初めとして、『浮出海面』（1985）、『永失我愛』（1986）、

『一半是火焰 一半是海水』(1986)など、数多くの代表作がある。

『空中小姐』は『当代』の1984年第2期に発表された真の意味における王朔の処女作である。二十世紀八十年代前半の中国社会はまだ禁欲主義から脱出したばかりで、小説で男女間の愛情を題材として取り上げるのは、その時代の流行に乗る形になる。『空中小姐』はその後テレビドラマ化し、さらに影響を広げた。

「俺」は中国南部で海軍に服役した時にまだ中学生の王眉と知り合い、好きになり、王眉は「俺」を敬慕するが、「恋人」にまでは発展しなかった。五年後、「俺」は北京に復員し、医薬会社の仕事が気に入らないので、無職となった。一方、王眉は高校を卒業してからスチュワーデスになった。その後南下した「俺」は王眉と真摯に愛し合うようになるが、「俺」の短所が多く現れ、結局破局に至ってしまった。ストーリーの最終場面で王眉の同僚の話借りて、王眉は飛行機事故で身を捨て乗客を助けるために犠牲者となり、ほかの人と恋人同士にもなったが、依然として「俺」を愛していたという話が語られる。海軍兵士だった時代の「俺」は王眉の目から見れば、勇敢な英雄に等しいに違いなかった。しかし、復員した「俺」は英雄どころか、自力で男らしく生計を立てることさえ難しくなり、不真面目な人間になりきって、王眉の理想主義的な考えからショックを受ける。初恋を忘れずに他人に恋を求めたこともあったが、結局事故死で最終局面を迎える。

『空中小姐』は王朔の数少ない恋愛小説の代表作となった。ユーモラスな会話も多く見られるが、基本的に伝統的な手法を運用し、一つの物語として完成した。のちの『頑主』シリーズではストーリーの完全性を軽視するようになり、ストーリーの流れは会話のユニットに綴られ、王朔の力点は言語自身に移ったと言えよう。『頑主』シリーズの主人公たちが人生を遊び半分に過ごすのとは異なって、『空中小姐』の主人公の「俺」は人生に流されて、海軍兵士という「高所」から無職者という「低所」になってしまった。それと対照的に世事に通じていない王眉はスチュワーデスになった。二人の地位が百八十度逆転したのである。『空中小姐』の発表時期は1984年であったが、文学雑誌の原稿審査周期を考えれば、原稿の作成時期は少なくとも一年か二年前であろう。小説の中の「俺」が海軍兵士の時は文化大革命期間中であり、王眉が少女から大人に成長しスチュワーデスになったのは当然ながら「改革開放」以降のことである。『空中小姐』の恋物語は実際には男女の主人公の社会的地位の逆転を描いており、それぞれの時代が背景にある。

一方、八十年代前半の中国経済はまだ離陸段階にあり、所得水準がかなり低水準にあった。飛行機に乗れるのは、政府の高官を除くと、ビジネスに大成功した商人や海外から帰国した華僑や華人に限り、当時の中国人の目から見れば、いわゆる「成功人士」である。スチュワーデスたちは飛行機に乗れるだけではなく、彼女たちの給料は都市部サラリーマンの数十倍、一般の庶民の数百倍にも当たるため、憧れの対象となっていた。

王朔は1958年に南京に生まれた。この年はいわゆる「大躍進」の年であった。のち王朔一家は北京に引越し、西部地域に定住した。北京で幼稚園から高卒まで教育を受けた。軍は長い間に神棚に祭られていたため、軍関係者の家族は一般の北京市民と一線を画した。文化大革命の期間中、王朔らの少年時代は比較自由であり、大人に成長すると、自然に親に用意された道を歩んでゆく。当時の社会状況を考えれば、解放軍に入隊させることは一番安全で近道だったのであろう。1976年夏ごろに海軍に入隊したが、出世できず、新米訓練の後に衛生員になった。1978年の中国海軍再編によって、陸地のポジションに配置され、小説を書き始め、初めての小説、短編の『等待』を発表した。1980年に解放軍文芸社(国家レベルの出版社)に作家として三ヶ月ぐらい勤めていたが、間もなく除隊し医薬会社の職について、二編目の小説を出版した。二編の小説はともに名の高い『解放軍文芸』での出版だったが、王朔は基本的に無名な青年だった。1984年に王朔は辞職し、商売の世界に進出したが、なかなか採算があわず、間もなく撤退し、独立した専業作家の道を歩み始めた。小説『空中小姐』の結末に現れたこの挫折感こそかつての激動の中国社会の縮図であるが、主人公の「俺」の経歴は王朔自身の経歴と非常に類似しており、換言すれば、『空中小姐』は青年王朔の自伝小説といっても過言ではない。王朔の愛情経歴を調べるすべもないが、子供時代から軍の駐屯地に成長し、少年青年時代に海軍に入っていた王朔は独特な視角から時代の異変に気づいていたに違いない。『空中小姐』は真の意味において小説創作の始まりであり、それ以降『頑主』シリーズの主人公の出身の原点でもあり、われわれにとって、「頑主」たちの不可解な行為にある程度の注解を付け加えているとも言える。

全体からいうと、『空中小姐』の「俺」は最終的に失敗者のイメージで立ち去った。精神の昇華もあったが、結局愛情、出世など何も成功せず何にも変えることができず、無念の終わりであった。『空中小姐』の「俺」は人生に挫折し、王眉の死に刺激を受け、人生や社会をもう一度真摯に考え始めたが、その答えは『頑主』シリーズに発見できる。しかし、『頑主』シリーズは『空中小姐』のリアリズムとはまったく異なる方向に走り、極端な場面設定で、当時の「告発文学」とは完全に違う手法で歪んだ政治を辛辣に風刺した。物語の枠組みは依然として「英雄——美人」という通俗小説の中にあり、できる限りの手法で情をおおることを試みたが、数十年の間政治に禁固された「文学」に新鮮な空気を吹き込んだのである。

『一半是火焰 一半是海水』の主人公は『空中小姐』の「俺」と比べると、かなりのならず者になり、犯罪者にまでなってしまった。小説は第一人称で二段階に渡る生活を描写している。第一段階では、主人公は詐欺の常習犯で、仲間たちとよく一緒にホテルにわなを仕掛けて、警察官と偽り、買春客からお金を騙し取るという犯行に及んだのである。ある

日、単純な大学生の呉迪と出会い、呉迪は一方的に愛に陥った。時間が経つにつれ、呉迪は悪い連中の真相を知ることになり、「俺」に報復するため、売春の道に走り、結局すべてに失望した呉迪は自殺した。一方、「俺」自身は詐欺容疑で逮捕され、刑務所に入れられることになった。第二段階は、「俺」が仮釈放された後の生活である。ストーリーの流れは第一段階と類似している。今度は主人公は悪行を改め、また若い大学生の胡亦と知り合った。しかし、胡は「俺」の勧告を聞き入れず、二人の詐欺師に騙され、レイプされてしまった。「俺」はその二人の悪者と殴りあい、警察官を呼び寄せたことで、過ちを改める動きが見られた。

『一半是火焰 一半是海水』は王朔にとっては恋愛小説から『頑主』シリーズへの掛け橋であるかもしれない。というのは、主人公は完全に社会と対立しており、『頑主』シリーズに登場する「頑主」は必ずしも社会と対立しないからである。つまり、彼らの考えはまだ未成熟であり、善と悪、反逆と従順との間の苦境から抜け出そうとしているところにある。小説の前半と後半の主人公の行動は正反対のもので、外部環境の変化に強く影響を受ける。『空中小姐』と同様に、「俺」の心の奥には、「愛」というものが潜んでおり、「俺」は常に「愛」を追求しているのである。

三・二、『頑主』シリーズ

『頑主』は1987年第6期の『收穫』に発表され、『玩的就是心跳』(1989)や『一点正经没有』(1989)などと合わせて『頑主』シリーズを構成し、王朔の文壇における地位を確立させた小説であった。

「頑主」とは何か。残念ながら、王朔が「頑主」の意味を説明したことがまったくないため、さまざまな解釈が飛びまわっている。「無頼」というふうに理解している人もいれば、「玩主」と書き換え、つまり「放浪する人」ということであるとする人もいる。これらの解釈は訳語としては悪くないかもしれないが、結局あいまいな認識に止まることになるであろう。実際には、「頑主」はやや下品な言葉で、北京方言では、本来がっしりとした強い人を指し、決して一方的に悪い言葉ではないのである。勝手に「無頼」とか、ならず者というふうに理解してしまうと、「頑主」の内心世界を誤解する恐れが生じる。イメージとしては、より下品な庶民言葉で言えば「牛人」や「牛逼人」がある。つまり、他人の意見を聞こうとせず、自分流のやり方を通し、自分の考えや態度などをかたくなに守る人たちである。

『頑主』は于観、楊重、馬青など「頑主」が「人の困難を解決して、うさを晴らさせ、人の代わりに罰を受ける」という旨を持つ「三T」会社を設立し、自称作家の宝康に文学賞を与え、用事のある医者代わりに恋人とのデートに出るなど、さまざまなお客と接することに伴ったできごとをフィクションで描いている。「T」は中国語の「替」のピンイン表

記の頭文字で、要するにお客のすべての要求に答えるいわゆる便利屋さんのことである。日々の業務に励むとともに、栄えれば人が寄り衰えれば人が去るという人生の弱点、社会の悪弊と偽りを生々しく表現している。このような便利屋さんは今日の中国では既に異端ではないが、社会全体から見ればまだ計画経済の統制に置かれていた八十年代中期の中国においてはとんでもないことだと人々に思わせ、特にこれらの「頑主」たちが会社を建て自ら経営することには、相当な喜劇効果があったのであろう。この設定で、さまざまな矛盾が出て、「頑主」らの言葉で社会の伝統をすべて解消したのである。

1991年第6期の『収穫』に発表された『動物凶猛』は少年の「頑主」または「頑主」の少年を描いたものである。1995年に大物監督の姜文によって脚色された『陽光燦爛的日子』（邦訳：太陽の少年）は同年度中国国産映画興行収入ランキング一位を占めた。小説は思春期にある「俺」と仲間の自由な少年時代及び「俺」と少女の米蘭の間に生じたぼんやりとした愛情を描いたものである。軍隊の寄り合い住宅に住む「俺」は不良少年と毎日を送っているため、親に退学させ、離れた別の学校に通わせたが、退屈な中で、「万能の鍵」を発明し、勝手に人の住宅に出入りをするようになり、ある日、米蘭の部屋に侵入し米蘭の写真を見た。その後、米蘭本人と巡り合い、付き合い始め、「俺」は思春期の性的興奮を抑えきれず、米蘭をレイプしたが、結局別れてしまった。

この作品は『頑主』など完全なフィクション小説と距離を置き始めたことで、一種のリアリズムに近い技法で「俺」の激動の少年時代を描き出した。王朔はここで既に架空の人物、架空の会話を必要としていない。録画のようにその時代自身の矛盾を生々しく表現している。

なぜ王朔はリアリズム的な手法を使い始めたのか。それは作品の題材による面もあることを否定できない。『頑主』シリーズにおいては「俺」を含んだ「頑主」たちが超然たる存在だったが、年齢や時代の流れは王朔の内心世界を変えたのかもしれない。王朔が言うには、

这个世界很单纯，任何人之间需要的其实不多，互相了解只能横生误会。公众是个陷阱，为别人或者即便出自真诚也在技术上做不到。

(2003年版文集自序 P1)

(仮訳：この世界はとても単純で、いかなる人々も互いに必要とするのは実は多くない。お互いに理解しようとして、却って誤解を招くだけだ。公衆は落とし穴で、人のため、またはたとえ誠実で人のために何をしようとしても、技術的に不可能なのだ。)

王朔の小説とその時代背景

“社会很容易被质疑，人群总是显得麻木且腐败，理想就那么清白吗？关于人之为人，我们又知道多少？”

(2003年版文集自序 P2)

(仮訳：社会はとても疑われやすい。群衆はいつも無関心で腐敗であるように見える。理想はほんとうにそんなに汚れないものなのか。人の人たるゆえんに関しては、私達にはどれぐらい分かるのか。)

やはり、王朔自分自身は自分を疑い始めて、もう一度生活を観察しようとしたのである。この思想に則って、リアリズムの道に走り、「頑主」情緒から離脱し、ストーリーのプロットに力を入れるようになって、言葉だけで勝負する『頑主』シリーズの手法とは異なって、出場人物の心理描写にも注意を払い始めたのである。この考えの変化は八十年代末から九十年代前半の中国にかけて全国民に生じたものかもしれない。それは、社会が正常化するにつれ、すべてを否定するのではなく、まじめに仕事をしなければいけない、というごく自然な考えである。

三・三、リアリズム

『頑主』シリーズの後に書かれた長編小説の『我是你爸爸』は、1991年第2期の雑誌『收穫』に発表され、ある父子家庭における中年の父親と思春期にある息子の矛盾と真情を描いている。特書すべきは、親の身分に対する設定である。父親の馬林生は離婚したので、子供の教育、監督、保護などすべての責任を負わなければならない、自己主張し始めた息子との間にさまざまな矛盾が生じる。その上、馬林生は書店の店員かつ文学愛好者なので、一般の労働者階級と異なって、中途半端ながらインテリの一員とも認められている。知識人の弱点をも有し、息子の意見をなかなか聞き入れず、硬直な教育手法で強引に息子に自分の話を聞かせる。言葉遣いの面においても知識人を風刺するという点においても『頑主』シリーズと類似しているが、それよりも世の中の森羅万象を細かく描いており、父子の深い絆が見えてくる。

『許爺』(1992)は王朔がまったく風刺や揶揄といった手法を使っていないと言っていいほどのリアリズムの作品である。王朔はただ忠実に「許爺」という北京人をまじめに再現したのである。許爺は、改革の波に翻弄された人である。「改革開放」初期の北京においては、タクシードライバーは収入の高いグループに属していた。許爺はメンツを重んじるため、大金を出して「頑主」たちと交友して惜しまない。彼はよくほらを吹くが、自分の教育レベルの低さに恥を感じる。許爺は内面的に非常に善良で、「頑主」の呉建新がある女性

を侮辱するのを見て腹にすえかね、いつも恐れてきた「頑主」に立ち向かったが、無駄に終わった。中国経済の発展によって、タクシードライバーの収入は相対的に大いに減ったため、日本にアルバイトをしに行ったが、結局、暴力団の手から売春婦に陥った北京娘を救出するために、暴力団員を殺した。

1999年に出版された『看上去很美』は王朔小説の集大成である。言語的にも、心理的にも、物語の筋に関する設定など、非常に洗練された手法で取り扱っている。男の子の目から文化大革命という時代への細かい観察を試みている。言葉はいつものように流暢で新鮮感が満ち溢れているが、生理年齢の若さと時折見られる児童の精神年齢の成熟との間に生じた不釣り合いをどう説明するかは、王朔が読者に出した宿題である。

四、王朔小説の言語的特徴とインテリ観

文学は言語の芸術であり、独特な言語の表現方式は王朔小説が注目を集める主要な原因の一つである。王朔小説の言語はユーモアに満ちており、物語の始めから終わりまで洗練された言葉で綴られている。王朔小説の主人公たちは社会下層に位置する小人物の代弁者として、社会を支配する伝統や権威に挑戦している。

王朔小説では知識人を皮肉る言葉や場面がよく見られる。時には知識人は社会や政府と同列に扱われ、こういう意味においては、王朔小説は反社会的でもあるといっても過言ではない。しかし、反対されるのは硬直したイデオロギーによる支配や伝統社会に存在する根強い不平等であり、一市民の立場に立って、「頑主」たちの口を借り、風刺、反語表現などの手法を用いて、ユーモラスな言葉で精力的に現実の不備や道学の偽善を極限まで厳しく戒めている。

王朔の作品は中国の政治的にも文化的にも中心的な役割をする北京を舞台に、社会下層にある北京の無頼青年たちを主人公とし、彼らを英雄に書き直して、中国の伝統的な観念を覆し、人生の真意を追求した。王朔作品は全体的に標準中国語を用いて物語を展開するが、会話中汚い言葉を含んだ北京方言の表現を取り入れることによって、生々しい雰囲気が表現される。

大半の王朔小説においては、いわゆる社会的責任感、献身的精神、永久不変の愛情や友情、要するに、すべての人々がかつて重んじてきた崇高な信仰や精神がすべて偽善的な代名詞に等しくなる。王朔は八十年代前半から九十年代にかけて、ベストセラー作家の地位を維持していた。早期の恋愛小説と犯罪を題材とした小説は市民化口語化に成功を収め、その後王朔の代表作になった『頑主』シリーズは社会の不備や偽善をからかって、中国の経済的発展、社会的転換期における人々の価値観の変化をうまく表現した。王朔は1949

年新中国が成立して以来の小説を含めて文学や芸術創作が「人民を教化する」という基本方針を覆して、庶民（人民）の口から物語ることを試みた。伝統的に教化する側に立つ教師や作家など知識人は偽善者または頑迷でただ孤高を標榜する者に帰せられ、それとは対照的に、社会の下層で生活する人や社会のアウトサイダーなど社会の負け組みとされてきたグループを初めて平等かつ好意的に取り上げ積極的にその暮らしぶりを描写することに力を入れたのである。

小説では、「作家」という「崇高」とされてきた職業は無職者にとっては最善の選択になり、インテリは偽善の代表になった。ここに、権威や師道の尊厳がなくされた。この考え方は現代中国においては少なくとも表面上新しいものではない。古人曰く、「一日の師は、終生の父」。この教えは二千年間中国人の頭に根を下ろしてきたが、文化大革命期間中にあった「批林批孔」など儒教の打倒を目指す一連の大批判運動の中で、インテリを「知識は多ければ多いほど反動的になる」と位置づけ、伝統的な道德規範を青少年たちの頭の中から徹底的に消し去った。インテリの愚かさを強調することは、転換期にある中国社会の混乱を物語る一方、社会的に特に同世代の教育をあまり受けていない若者に連帯感を呼びかけるに成功するに違いない。実際には、新時期に中国共産党中央が新たに提唱した「知識を尊重し、人材を尊重する」方針と食い違いうように見える。しかし、もう一度王朔の小説を読んで、よく考えてみると、王朔の作品にはより深い意味が潜んでいることが窺える。

中国は儒教の国ともされ、「万般皆下品、惟有讀書高」（万般は皆下品にして、ただ読書のみ高し）という一言がある。真の意味は天下の大部分の人々は皆官位官職の低い下品に列せられているが、しかし唯一読書人のみが高い官位官職に就くということである。つまり、中国人の頭の奥には「読書就是為了当官」（読書人になるのは官僚になるため）という観念が根強く存在しており、科挙精神はあるが、科学精神、自由精神など、インテリが本来持つべき理念は乏しい。王朔が批判したインテリは真のインテリではないかもしれない。王朔はこれらの偽インテリの連中を指したのである。シニシズムであるゆえに、一部の中国知識人には二面性があり、それは権力者に対しては犬儒であるが、権力者の代理人としては庶民に向かって権力者よりも偽善的であり、時には凶悪ですらあることである。「頑主」は時にならず者と見られるから、道德の十字架を背負う必要はまったくないので、「人」または「まじめな人」には言えないことを言い放題である。『一点正经没有』（1989）『千万别把我当人』（1989）など題名からもその意味合いが窺える。

次に『一点正经没有』などの具体例を取り上げ、王朔小説の言語的特徴を分析しよう。

ア、

『一点正经没有』の初めは、「俺」が妻に暇をつぶす方法を問いかける場面である。国を

治めることと綿を打つこと、そして豚の頭を塩漬けにすることを一緒に取り上げることで、妻の安佳が国を治めることと庶民が生計を立てることがまったく同じと考えていることをそれとなく示している。結局、何もできなければ作家になろうという結論を出す。

“你说，”我问安佳，“如果一个人吃饱了饭没事干，他怎么消磨时间最好？”

“睡觉”

“睡过了觉呢？已经睡得不能再睡了？”

“他有没有别的本事？譬如治理国家、弹棉花、腌制猪头等等。”

“没有，一概没有，四体不勤，五谷不分。”

“他是不是很有追求？”

“追求得一塌糊涂。”

“他认多少字？”

“加上错别字有那么三五千吧。”

“那就当作家吧。”安佳平静地望着我，“既然他什么也干不了又不甘混同于一般老百姓。”

（一点正经没有，P2。）

イ、

“依着你，教点人民什么好呢？怎么过日子？这不用教吧？”

“得教！告诉人民光自个日子过好了不算本事，让政府的日子过好了那才是好样的。譬如吧，政府揭不开锅了你一天三顿赞助出一顿成不成？得跟人民讲清楚，现在当务之急是上政府把日子过下去。你想啊，两亿多文盲，五千多万残疾人……容易吗？大家伸把手……”

（一点正经没有，P5。）

ここで、まずは「人民を教化する」ことを取り上げ、これまでの政府の犯した過ち、そして作家や知識人の偽善や御用文人を「俺」は辛辣に風刺している。要するに作家は人民に教化することを任務とし、そして、「政府の機嫌を取る」ことが最も大事だという反語を使っている。

ウ、

……“不行啦，生意不好做啦，你没听说吗？现在全市的闲散人员都进文艺界了，有嗓子的当歌星，腿脚利索地当舞星，会编笑话的当作家。国家也是没办法，临街房子都开铺子了，实在没法安置了，给政策吧。”

（一点正经没有，P10。）

呉胖子は政府が「文芸工作者」と社会や政府に称えられてきた芸能界や文学界の人々を揶揄した。とりわけ、「冗談を言う人は作家になれ」ということは前の「喉があるやつはスター歌手になれ、歩けるやつはスターダンサーになれ」との流れに自然に乗ったものだが、実はかけ言葉で、「作家」たちにはとんでもない者が数多くあるということに対する風刺なのである。

エ、

“乡下嗑我到能唠百十万字。”刘会元也趴了牌说，“一九六八年我插过俩月队，乡下那点齷齪事听过见过也干过。”

“那你改唠乡下嗑得了。”我说，“不就是野合私奔让二流子操互相操那一套城里人不干的事全糊乡下人脑门子上反正乡下人也不认字。”

“乡下人不认字城里人瞧新鲜。”吴胖子也趴了牌，“故事一律发生在黄河边上黄土坡要用笔操了人还得夸你有历史感。”

(一点正经没有, P11.)

最後の文章は日本語に訳すと、次のような意味になり、乱暴な日本語であるため、敢えて日本語の原文に句読点をつけることを試みる。「田舎の人は字が読めない。都会の人には新鮮感がある。」呉胖子も牌を伏せ、「(セックスの) 物語は、すべて黄河の水際、黄土坂あたりに発生する。ペンで人をファックしたら、歴史観があるって褒められるぜ。」

ここではリアリズムの手法で六、七十年代毛沢東の呼びかけに応じ農村に行った知識青年の記憶が生々しく綴られているとともに、八十年代中国に張芸謀監督に代表される民族性を問い詰める風潮への皮肉な言い方にもなっている。「頑主」たちの目から見れば、高く取り上げられてきた民族や歴史が虚無に帰着されてしまうのである。

オ、

……大家派我当文人使大家对我的信任，也是我的光荣。这几个人力拍马屁的功夫就数我到家，这么重大的事情换个生手干我还不放心呢。

“我倒不是不想让你当御用文人。”安佳说，“问题是养狗还得管饭呢，没有白使唤人家的。你现在去和上边商量，如果上边答应好好养你，给政治待遇给房子给津贴，你当大茶壶我也不管。”

“咱不做出点成绩人家能给好脸吗？要不怎么巴结得上，万一你大汉奸似忠呢？得给人家时间观察。就说养狗者道理你不也得为一阵子才能看出是忠心耿耿还是喂不熟的白眼狼。”

“贱！”安佳白我一眼，“你这叫贱！”

“我就贱了，怎么啦？”我一挺胸脯，“贱得光荣！我不怕骂，我又没贱外人，自个儿的国家，当孙子我都干！”

（一点正经没有，P14-15。）

「俺」が「作家」という仕事を割当てられたことに対して自信満々の原因は、自分が機嫌取りが一番上手だということにあり、権力の手先として働く御用文学者を痛烈に揶揄している。最後に、妻の安佳に賤しいと言われた「俺」は、外人にでなく国に対して態度が賤しいと主張した。「賤」は中国語では形容詞なので、原則として、後に目的語がつくことができないが、ここでは動詞として使われ、「外人」を目的語にし、「俺」の口調を強める役割を果たしている。「俺」の話は実際には正反対のことを言っており、反語表現である。

カ、

有男女老少走过来，这帮人就各选对象迎上去，诡秘地小声问：

“有美子吗？”

“有日子吗？”

“有港子吗？”

马青和于观问的则是：“有请作家吃饭的吗？”

（一点正经没有，P22。）

「美子」、「日子」、「港子」とはそれぞれ米ドル、日本円そして香港ドルのことである。「子」と言う漢字を勝手に名詞に付け加えるのが、北京の言語的習慣で、話し手と聞き手両方の気持ちを軽くする役割を果たす。これらの連中は闇市場のブローカーである。でも「殺風景な」罵青と于観は「作家に食事の接待する人はいるかい」と言い、自称作家の真相を明らかにするとともに、まじめそうに裏取引する人々と一線を画し、独特な雰囲気は紙上にありありと現れている。

キ、

“没人想到你们国家去。”吴胖子对老外说，“我们在自个儿国家呆着挺好。”

“是的，我很羡慕。”老外说，“也就是在中国，在我们那儿没人成天这么坐着说闲话——饿死了。”

“那你们也革命吧，一革命就全饿不死了。”

“革不起来，反正也全饿不死，看你们革了。”

“看我们热闹是不是？就知道你们大鼻子都安的这心。”

“又夸我？不不，不要老夸我。我们做的很不够，比你们不如。你们把全国地主都斗了，我们也就使节两架飞机，绑架个资本家。”

“你，你是干吗的——在你们国家？”

“在我们国家我是好孩子，在德国我是红军。”

“德国红军！”我们大惊失色，“恐怖分子？唉哟，怎么竟碰上这人？我们还以为你是资本家呢。”

“你快走吧。”我们拉起老外往外推，“要不我们得把你扭送公安局，国际公约得遵守啊。”

“你们怎么这态度？”老外被轰出来，十分不满，“我们一向之间资本主义国家祸害。”

“我们今儿是等资本家呢，没等你。”我们轰走老外，关紧们，犹自心跳，“德国红军？那也是穷人的队伍了。”然后一起用眼瞧着马青。

（一点正经没有，P60-61。）

ここで、ドイツ人の言葉で中国社会の政治運動や効率の低さを揶揄しているが、「俺たち」の口から当時北京市民の考えを生々しく表現している。「窮人的隊伍」とは中華人民共和国が成立する前の共産軍のことで、時代の象徴でもある。後半における「頑主」の表現は社会ルールをちゃんと守ることも窺える。

ク、

“不签！”我把纸摔回给小瘦子怀里，恶声恶气地说，“管你们那么多闲事呢！稍拉着我们犯错误，我们这点人权够用了，多了还不会使呢！”

“你们就事鼓吹‘全盘西化’那帮吧？”杨重说，“回去告诉你们头儿，小诸葛亮脱裤衩——装明‘灯儿’！想试巴着给中国指道儿，我们还哪儿都不去了！”

（一点正经没有，P78。）

「人権団体の活動家」をも著しく貶めている。請願書の紙を小便の臭いがすると言い、その人にサインを求められる時に、「俺」は「活動家」を嘲笑して、下品な歇後語を使って、「頑主」の頑固さを表現している。ここで王朔の真意は何なのか、それは王朔自分自身にしか分からないことかもしれない。というのは、ここの「人権活動家」に対する皮肉は確かに彼らがうそつきだという一部の中国人の潜在意識に由来したものであろうが、ひょっとすると、作家王朔の中国の出版事業を管理する検査当局への機嫌取りでもあるのかもしれない。

ケ、

我们走到丁小鲁身边，看着他对边和他交谈的那个彬彬有礼的妇女问：

“你这个朋友是干什么的？”

“日本人。”丁小鲁忙给我们介绍，“日本记者。”

“日本人？”我们上下打量着这个妇女，“日本那儿的？”

“北海道的。”日本妇女忙据鞠躬递名片，“初次见面，请多关照。”

“初次见面？不对吧？”我说，“没侵略过中国吗？”

“噢，没有没有。事实那时我还小，而是前日本陆军中没有女子战斗队。”

“没有吗？噢，好像是没有——那也不能就因此认为自己没责任了！”我声色俱厉地说，“也应该好好反省。”

“你别这样。”丁小鲁说我，“你这是干吗？人家庆子是亲华人士。”

“是吗？你是亲华的？”

“是的。”日本妇女慌乱地点头。

“亲华的就算啦，本来我是准备打到日本，制造一次东京大屠杀，搞点国际性新闻。罢了罢了。”

（一点正经没有，P79-80。）

日本人との接し方は、ドイツ人と異なる。一般の中国人の歴史記憶によるものであろうが、ここで「頑主」たちは「日本人民」に対して友好的であることを示している。これは、わざと日本人の話題を取り上げることで、一種の大衆心理に従う形の創作手法である。

コ、

“林蓓你小心点，宝康不是好东西，你没听说现在管流氓不叫流氓叫作家了吗？”

（玩主，P57。）

これは、作家は最低と、作家に対して罵る言葉である。

サ、

“回来！”老头子伸手拦住了于观去路，仰头看着高大的儿子，“坐下，我要跟你谈谈。”

于观一屁股坐在沙发上，抄起一本《中国老年》杂志乱翻着：“今儿麻将桌人不齐？”

“严肃点。”老头子挨着儿子坐下，“我要了解了解你的思想，你每天都在干什么？”

“吃、喝、说话儿、睡觉，和你一样。”

“不许你用这种无赖强调跟我说话！我现在很为你担心，你也老大不小了，就这么一天

天晃荡下去？该想想将来了，该想想怎么能多为人民做些有益的事。”

于观看着一本正经的老头子笑起来。

“你笑什么？”老头子涨红脸，“难道说得不对？”

“对，我没说不对，我在笑我自个。”

（玩主，P73，75。）

これは、于観と父親の会話である。父親は真剣だが、于観はまったく相手にせず、落差が生じることで、于観の生活の空虚な実態が浮き彫りになっている。

シ、

“没活你也不忙，有活你就马上开始忙。你怎么变得这么好吃懒做，我记得你也是苦出身，小时候讨饭让地主的狗咬过，好久没掀裤腿给别人看了吧？”

“你怎么长这么大的？我好吃懒做怎么把你养的这么胖？”

“人民养育的，人民把钱发给你让你培养得革命后代。”

“你忘了小时候我怎么给你把尿的？”

“……”

“没词儿了吧？”老头子洋洋得意地说，“别跟老人比这比那的，你才会走路几天？”

“这话得这么说，咱们谁管谁叫爸爸？你要交我把爸爸我也给你把尿。”

（玩主，P76）

これも于観と父親の会話である。「足を地主の犬に噛まれたことがある」とは時代感のある言葉で、于観はこれを揶揄するが、それは、父親が絶えず自分に説教することへの反発でもある。于観の話は極端に無頼的に聞こえるが、読者の耳に入るのは権威あるものに対する挑戦でもある。

ス、

『頑主』の最後に、対比の手法を用いて知識人の趙堯舜の表と裏を描いている。趙堯舜の言葉を借りて、社会の「頑主」たちに対する認識を引き出している。知識人で偽善者の趙堯舜は、溺死した子供にまったく関心を持たず、「頑主」たちを蔑視するが、彼らを弱者とみなし、社会の彼らに対する関心を高めようと約束する。実は趙堯舜の「堯舜」そのものは知識人への揶揄でもある。

“谁死了？”

“一个不会水的孩子。”

“噢，这样的人也要开追悼会吗？看来你们每天的工作确实没有什么意思。”

“的确没意思。”

“这不奇怪。向你们这种年轻人，没受过什么教育，不可能再有什么发展，在社会上备受人歧视，内心很痛苦，但又只好如此，强颜欢笑。”

预感慢慢点着一根烟，抬脸凝视赵尧舜。

赵尧舜诚恳地望着于观：“这不公平，社会应该为你们再创造更好的条件。我要大声疾呼，让全社会都来关心你们。我已经不是青年了，但我身上仍流动着热血，仍爱激动，这些天，我一想到你、马青、杨重这些可爱的青年，我就不能自己，就睡不着觉。”

（玩主，P80。）

セ、

“我和一百多个女的睡过觉。”

女孩放声笑起来，笑得那么肆无忌惮，那么开心。

“你笑起来，”我说，“跟个傻丫头似的。”

女孩一下不笑了，悻悻地白了我一眼：“我不说你，你也别说我了。实话告诉你，我已经谈了一年多恋爱了。”女孩又笑了，有几分得意。

“是你的傻冒同学吧？”

“她才不傻呢，是学生会干部。”

“那还不傻？傻得已经没法练了。”

“哼，你这种只被爸爸妈妈吻过的小毛头也配说他。”

“我要是他，就敢跟你睡觉。”我微笑地说，“他敢吗？”

（一半是火焰 一半是海水 P6）

ここで、「俺」と吳迪との会話の言葉遣いは完全に異なっている。吳迪は非常に単純で、「俺」は性に対していい加減な態度を取っており、鮮明な対比をなしている。

ソ、

……内容嘛也无非是教育青年人如何读书，如何爱国，是一些尽人皆知，各种通俗历史小册子都有的先哲故事，念几首“吼”派的诗，整个一个师傅教出的徒弟。等到一个潇洒的男大学生教导青年人应该如何培育教官“爱情之花”时，我笑得几乎喘不过气来，已明显异于听众不是发出的会意的笑声。陈伟玲生气地等我，吴迪则开始用指甲悄悄却十分使劲地掐我。

“你们注意点。”陈伟玲不客气地说我，“自己没受过什么教育，就该好好听。”

“实话跟你说，”我也故意难堪的大声说，“我受这种教育的时候，你还是液体呢。”

(一般是火焰 一半是海水 P11)

「俺」の目から見ると、大学生は幼稚であり、世事に疎い。特に「愛情の花」に関する表現は、「俺」の空しい精神の表出でもある。陳偉玲は悪い人ではないが、内容の浅い説教に関心を示す。「俺」の最後の一言は非常に下品で、矛盾が爆発する。

終わりに

王朔は庶民の立場に立って、この時代の誠実な私達の身の回りで発生している生活を書いて、真実な画面をわれわれに展示し、伝統的なイデオロギーの言葉を覆して、そのでたらめさを暴露し、人々を現実的な世界に引き戻し、まじめに生活のことを考えさせる。そこで彼は理想主義のすべてを風刺し、全力を尽くして知識人を嘲笑している。

王朔は、伝統への反逆者である。王朔は、生活は是非善悪論や道徳で量ることができず、当時の環境によって自然の規律で発展していくものであり、作家たちは自分なりの道徳観を持つべきであると言う。王朔小説の意味は、正統から見て異端で、早いうちに世間の情緒や長い間のイデオロギーの支配による知識人という階層の自由思想の欠如に痛烈な批判を行ったことにある。王朔は魯迅が真正面から旧勢力と戦ったのに対して、表面上は現実を受け入れ、その上で、大量に反語を使って側面から現実の欠点を風刺した。王朔小説の伝統体制に対する反逆精神は伝統道徳に基づいた社会ルールを無視するほか、文学そのものに対しても対決の姿勢を示している。そこには人文精神、社会秩序、生活方式そしてイデオロギーによる支配などがある。これは中国数十年間、特に文化大革命期間中において中国文学が一元化され、作家が高位にある人のメガホンになってしまったことへのごく自然な反発であろう。

要するに、王朔小説の中心と原点は「頑主」にある。精力的な「頑主」は『頑主』シリーズに表現されるが、恋愛小説にある「頑主」が真面目そうに考える段階、リアリズム段階に入った「頑主」の情緒は安定的に維持され、自分の生計を立てようとする。すなわち、無産階級から小市民への転化ということであろう。『看上去很美』は「頑主」の幼年時代を回顧したものだが、書き振りは穏やかで、中年期に入った王朔の静かな心境が読み取れる。

王朔の「頑主」たちは、当時中国の激しい経済的、社会的移転プロセスにおいてインテリより先に自由の道に走り、伝統的な社会的秩序に対する反逆の性格を持つ。彼らは古いルールを破って、自分たちを社会の部外者という立場に置きながら、自己価値を追求し、

社会に新たなインパクトを与えた。言うまでもなく、「頑主」の時代は既に過ぎ去った。中国は経済的にも社会的にも、政治的にも八十年代の堅苦しい試行段階を経て、九十年代に入ると、根本的な変化を遂げた。中国の市場経済改革と世界経済のグローバル化が進められた。九十年代後半特に1997年アジア経済危機後、中国経済は一人勝ちによって、外資が絶えず中国大陸に入り込み、経済発展と経済成長が加速した。「世界の工場」にまで成長したと同時に、中国は責任を負う国家として対内的にも、対外的にも、市場経済の精神に則って、きちんとした規則の下で社会を前へ前へと進めなければいけない時代に入ったのである。

「頑主」たちからすると、人生の意義はただ「楽しみを探す」ことにあつて、深く思慮する必要はまったくないというのである。彼らは社会的ルールとは完全に相容れず、理性的に社会の変革について興味を持たない。彼らは文化大革命で少年時代を過ごし、「改革開放」政策の実施とともに、一人の大人として社会的責任を負うべき時がやってくると、残念ながら、心の構えがないだけでなく、年少期の自由自在は今になって完全なマイナス要因になった。教育をほとんど受けたことがなく、紅衛兵的な放浪生活の結果として、人類社会は長期の進化によって確立された社会的ルールが如何に重要かを分からずにいるのである。

一方、都市部の絶えず増えつつある高層ビルとますます広く長く伸びていく道路が中国の経済発展を謳歌しているように存在するが、この繁栄の背後にさまざまな社会問題が潜んでいる。農村部から大都市に入った出稼ぎ労働者（農民工）が大都市で丸一年間も頑張ってきたのに、給料をまったくもらえないことがよく報道される。しかし、中国の主流社会はこれに対しまったくと言っていいほど無関心のようで、2001年にWTO加盟への達成、2008年北京オリンピック大会と2010年上海万国博覧会の招致の成功など、一連の出来事は中国社会を国際社会に引き込むとともに、中国の社会に大きな変化をもたらした。

八十年代の「頑主」たちが社会的に大いに共感と呼んだのとは対照的に、今日の弱者はただの無能力者に帰する。中国は既に文化面での移転期を経て、これから相当長い安定期に向かうのであろう。八十年代と根本的に異なるのは、新たな貧富による不平等が蔓延し、人々はこれを考える暇もなく、ただお金をもうけることに一所懸命に働き、現実を受動的に受け入れ、「頑主」たちのように現実を揶揄する余裕もなければ、勇気もないことである。

代表的な王朔小説（中国語表記。カッコ内は筆者による日本語の直訳。）

短篇小说 等待（待つ）《解放军文艺》1978年第11期

中篇小说 空中小姐（スチュワーデス）《当代》1984年第2期

王朔の小説とその時代背景

- 中篇小说 浮出海面（海面に浮かびだす）《当代》1985年第6期
中篇小说 一半是火焰 一半是海水（半分は火炎 半分は海水）《啄木鸟》1986年第2期
中篇小说 橡皮人（ゴム人）《青年文学》1986年第11, 12期
中篇小说 顽主（頑固な人）《收获》1986年第6期
中篇小说 痴人（馬鹿な人）《芒种》1988年第4期
中篇小说 一点正经没有（まったく不真面目）1989年第4期《中国作家》
长篇小说 玩的就是心跳（遊んだのは動悸）1989年 作家出版社
长篇小说 千万别把我当人（くれぐれも俺を人間とみなすな）《钟山》1989第4, 5, 6期
中篇小说 谁比谁傻多少（誰が誰より馬鹿なの）《花城》1991年第5期
长篇小说 我是你爸爸（お前の父さんだよ）《收获》1991年第2期
中篇小说 动物凶猛（動物の狂暴）《收获》1991年第6期
中篇小说 许爷（許という旦那）《上海文学》1992年第4期
中篇小说 过把瘾就死（楽しんで死のう）《小说界》1992年第4期
中篇小说 刘慧芳（劉慧芳）《钟山》1992年第4期
长篇小说 看上去很美（見たところとても美しい）1999年 华艺出版社

引用小説版本

- 孙波 杜建业（1992）主编 编者的话 pp1-3 无人喝彩 pp1-103 刘慧芳 pp103-170 我是你爸爸 pp171-428 人莫予毒 pp429-526 懵然无知 pp527-577 王朔文集 3 矫情卷 华艺出版社
王朔（2003）2003年版文集自序（2001年12月7日）pp1-2 千万别把我当人 pp1-187 懵然无知 pp188-234 修改后发表 pp235-275 谁比谁傻多少 pp276-320 王朔文集 千万别把我当人 2003年 云南人民出版社
王朔（2003）永失我爱 pp1-44 橡皮人 pp45-138 我是“狼” pp139-177 给我顶住 pp178-229 刘慧芳 pp318-375 王朔文集 橡皮人 云南人民出版社。
王朔（2004），新时期小说名家名篇，一半是火焰 一半是海水，中国电影出版社，原版，啄木鸟，1986年第2期。
王朔（2004），新时期小说名家名篇，玩主，中国电影出版社，原版，收获，1987年第6期。
王朔（2004），新时期小说名家名篇，一点正经都没有，中国电影出版社，原版，中国作家，1989年第4期。

主要参考文献：

- 陈东林（2000）王朔批判 Animadvert 全国各大著名网站争鸣作品 文学批评争鸣丛书，时代文艺出版社。
高波（1993）编 毒蜘蛛·风暴眼·大会战 大师还是痞子，北京燕山出版社。
金振胜（1995）和平时的抗争——王朔小说解读，天中学刊，第10卷第4期，pp51-54，pp56-56。
肖佩华（2004）新市民文化小说的兴起和新市民文化的凸现——兼谈“王朔和池莉现象”，湖北社会科学，

pp25-27。

张峰（1999）编 王朔挑战金庸，广州出版社。

朱旭晨（2002）评王朔小说的语言特征，华北科技学院学报，第4卷第1期，pp105-106。